

来年は居ませんからと告げられし島津先生のかなしき予言  
清水春美

今年の四月に、八十九歳で逝去された島津忠夫さんへの追悼歌。大阪大名誉教授で中世日本文学の研究者だった島津さんは、縁あって岐阜県郡上市に蔵書を寄贈され、同市の「古今伝授の里フィールドミュージアム」の開館に尽力された。古今伝授の里で「連歌教室」を開設、この歌はそこでの発言に取材しているようだ。

私は、さまざまなご縁で島津さんと親しくさせていた。まず御著書『百人一首』訳注(角川文庫)。早稲田大学の授業で五年ほど教科書に使わせていただいた。二〇〇八年には『島津忠夫著作集』十五巻・別巻二巻で「現代短歌大賞」を受けていただいた。木島泉さんとのご縁で古今伝授の里に通うようになって、毎年かならず二日間ごいっしよする機会をもった。等々である。郡上で開催された「心の花」全国大会で、講演していただいたの思い出す。ご冥福をお祈りする。

気がつくと家のすみずみに夜は来て母がいないこと  
川又和志

抽象化されているで、意味的にはやや漠然としているが、母上追慕の作のようだ。あえて一首が重くならない工夫がなされている点に注目した。さり気ないかたちが、洗練された一首にしている。

坂道に自転車をおし水無月のおもき空気の奥へ分け  
大谷ゆかり

入る  
自転車を押して坂をのぼっている場面を想像すればい

いのだろう。季節感が一首中で大きな働きをしている点が、短歌に奥行きをもたらしている。

子午線の通る広場の沖合に動く見えぬ雲と客船

小川祐子

広場は、子午線の町として知られる明石市の広場、船は瀬戸内海を通る船を思い浮かべればいいのだろう。時間が止まったようなしづらくが主題。

若夏に森の体温上がり来てキイロスズホタルの腹に  
灯ともる  
浜田ゆり子

「若夏」は古くからある沖縄地方の語で、新暦の四、五月の頃のことと辞書にある。キイロスズホタルも沖縄諸島特有のホタル。ローカルカラーの濃い語をあえて採用して、標準語だけの歌とはおのずから別種の雰囲気を作り上げている。

こころざす心のしづく序文あり信綱鷗外明治のをと  
斎藤佐知子

佐佐木信綱の第一歌集『思草』をうたう。『思草』には依田百川(依田学海)、源高甚(森鷗外)、寧齋主人(野口寧齋)三人の序が付されている。中の鷗外序文に焦点を当てて、「明治の男」の志をクローズアップする。上句の緊迫した調べと内容のバランスがポイント。

盤上を自在に動く飛車と角例えていえば掃除機ルン  
武藤義哉

バ  
比喻の意外性。一時間に二局も三局もさすような素人将棋である。意外な比喻に一瞬驚き笑ってしまう、そこが持ち味。